

秋

晴れの、これ以上爽やかな週末はないのじゃないかという一日。どんびしやりこの日に遠足をはめ込んだ学年の子どもたちは、朝から尋常でない昂揚感に満ちている。

「だれの行いがよかつたんだ。」

「ぼくに決まってるじゃないですか。」

若い担任教員の戯れ言にだれもが笑う。重苦しい空気に包まれることも珍しくはないこの部屋だが、天気一つでガラッと変わるのだ。そんなあつけらんとした単純さが尊く思えてくる。人の心なんて天気次第くらいがちょうどいい。

車窓いっぱい、まるで海外旅行にでも行くかのようには手を振って子どもたちが出て行くと、入れ替わって業者が訪れてくる。ああ、そうだった、今日から屋上の工事が入っていたのだ。うちのような老朽化した大規模校は、ほとんど毎日のように何かしらの工事をしているのだ。

「いい天気よかつたですね。」

ヘルメットを小脇に抱えたまだ若い責任者にそう言う、日に焼けた顔がパツと輝いた。

「はい。施工日和です。」

炎天の中で年嵩の職人たちを指揮しなければならなかった前回の工事では見なかつた表情だ。

遠足も工事もすべて順調に終わり、子どもたちもみんな下校していった。学年ごとに鳥状に机を組み合わせているこの部屋の週の終わりは、どこか祭りの終わりに似ている。駄菓子を詰め込んだ缶を開ける音、だれかの差し入れに上がる歓声、ようやく気を抜くことができた鳥々の号砲だ。

「今週もどうにか終わりましたね。」

難しい学級を任されているベテラン教員を慮って職員が声をかけている。

「ようやくね。でも、終わったと思っただけにするのは昨日なの。」

「えつ、今日は金曜なの？」

「うん、金曜になるとまた月曜が始まると思っただけドキしてる。」

あけすけに苦しみ語られるうちは大丈夫なのかもしれないが、それぞれの職員が抱えている苦悩もこの部屋には確かに痼っているのだと気づく。秋晴れの一日ぐらいではどうにもならない重さだ。

退職の日までカウントダウンするアプリを入れた。そんなものに心動かされてどうする、と思う一方で、どう動かされるのだろうかという興味も湧いた。来る朝ごとに、数が一つ減っているのを見る。でも、それが天気ほどには、心動かないのである。



専業ババ奮闘記(その2) 26

木幡智恵美

虫博士(1)

寛大、実歩が「すいかのおつつあん」と名付けた我が長男は、保育所に通う頃には「虫博士」と呼ばれていた。二歳半頃に連れて行った鳥取砂丘では、砂丘に目もくれず、一匹の小さな虫をいじるだけで時を過ごし、サーカスを見に行った際は、捕まえていたトノサマバッタが逃げ出し、ただただトノサマバッタ探しをする羽目に。保育所の遠足が終わった後、貼り出された写真に一枚も写っていないのは、人のいるところではなく、虫のいるところだけを歩き回っていたせいだ。小学校に上がってからも、登校中に拾ったマツモムシを放さないで、見かねた先生が、水を入れたコップに入れ、机の上においてくださったという。

虫のいる時季になると、虫、虫、虫のいない冬には、飛行機、鳥、ウルトラマンと、年ごとにマイブームが変わり、虫への傾倒は小学校の低学年頃まで続いた。ファーブル昆虫記を読んでも、フンコロガシ捜しに私や二男までが付き合わされ、三人とも、靴を牛糞まみれにしたことも懐かしい思い出だ。

寛大は、「すいかのおつつあん」みたいに風変わりではなく、ごく普通の男の子だ。でも、まわりの空気をほんわかとさせるところ、友たちと喧嘩にならないようふわりとかわすところ、そして虫好きなどころなど、似ているところがある。「Tくんから聞いた」とよく言うので、虫については仲良しのTくんの影響があるようだ。

畑に行くと、九月初旬に植えたブロッコリーの苗がやつと根付いたと思っただら、スジだけになっていた。アオムシだ。以来、行くと、アオムシを見てつづいた。何とか葉が再生し、尽きることのないアオムシつぶしにかかっていた際、ふと思った。そうだ、寛大に持って帰って、アオムシから蛹、蛹から蝶へと羽化するところを見せてやろう。ビニール袋に葉っぱを入れ、五匹ほどアオムシを入れた。寛大、実歩を保育所に迎えに行き、アオムシの話をする、家の戸を開けるなり「アオムシどこ」寛大が飛んで入った。

30代フリーター やあ、ジイさん。トランプは非戦指向の大統領だという指摘を沢村互という朝日新聞のアメリカ総局長がしていた。

年金生活者 北朝鮮の金正恩と交渉し、米朝戦争のリスクを取り除いたことなどを考えれば、妥当な見方だ。

「トランプ氏はその直感で国民の非戦指向も感じ取っていた。だからこそデイルにいそしんだ。『ボルトンの言うままにしたら、第6次世界大戦になっていた』。トランプ氏のツイートだ」と沢村は書いている（10月2日朝刊）。正しいかどうかは「歴史の検証を待たねばなるまい」と断定は避けているが、「デイルにいそしんだ」という指摘には説得力がある。トランプは安全保障の課題を、彼の得意なデイル（取引）にしてしまうことで、戦争のリスクを低減させたと言うことができる。

30代 中国に敵意むき出しのトランプが？

年金 彼が安全保障をデイル化できず、国民の皆さんに戻すのです」と語ったトランプの大統領就任演説は、階級間の権力の移行を目指す「革命家」の演説だった。

30代 「革命家」なんてトランプに最もふさわしくない呼称だ。

年金 彼の登場の背景にあるのは国家からの権力の分散という前世紀からの世界的な流れだ。米ソを超大国たらしめていた東西冷戦の終結は、両国からの権力の分散を促した。冷戦に敗北したソ連は解体し、その権力は連邦を構成していた国々と東欧諸国に分散した。それは米国の一極支配を確立するかに見えたが、敵を失ったこの超大国は超大国としての存在理由を削ぎ取られ、自らの権力の一部が、西側陣営と呼ばれた先進諸国などに分散するのを避けられなかった。

加えて資本のグローバル化が国家から国家間システムへの権力の分散を加速した。代表的な国家間システムである国連やEUは一見すると、以前より力を低下させているように見える。だ

たのは、現在の戦争がデイルの様相を帯びるようになっていたからだ。世界の戦争の本流は東西冷戦を境に、破壊と流血をとまぬ熱い戦争、リアルな戦争から、抑止力を競い合う冷たい戦争、バーチャルな戦争にかわった。抑止力の競争は、現実の戦闘よりも予測がしやすく、それだけ計算可能だ。最小限の費用で最大限の効果をあげることがより求められるようになる。

抑止力を高めるには軍備を増強すればいいが、それにかかるコストを無制限に増やせば、国家の台所が危うくなる。どうすれば限られた費用で他国の攻撃の意思を削ぐことができるか、相手の能力や意図を読み取りながら、かけ引きをすることを迫られる。そこにデイルとの共通点がある。

トランプは合衆国を巨大企業に見立て、それを「偉大」にするために、経営者として他国と取引して稼ぐのが大統領の役目だと思っているのだろう。それがアメリカを非戦指向にしていく。北朝鮮との取引だけでなく、アフ

ガ、世界にはほかに多数の国家間システムが誕生しており、それらを足し合わせた権力は主権国家の方向を絶えず左右している。

アフガニスタンとイラクでの戦争の泥沼化は、アメリカの戦争遂行能力の著しい低下をあらわにした。戦争のリスクを少しでも除去することがアメリカ

ガニスタンやイラクから米軍を引き揚げつつあるのも、イスラエルと中東2カ国との国交樹立を仲介したのも、その「成果」と見ることができている。

30代 トランプは、全世界のためのアメリカをアメリカのためのアメリカに、国民のための大統領を分断された国民の一方の側のための大統領に変えてしまった。

年金 アメリカのためのアメリカは軍事的には、世界の警察官の役割の放棄、北朝鮮との核をめぐる妥協、イラク、アフガニスタンからの軍隊の引き揚げといった形で具体化され、それだけ戦争のリスクは遠ざけられた。それが安全保障のデイル化によることはさつき言ったとおりだ。

一方、国民のための大統領でなくなったトランプは、特定の階級を代表して「階級闘争」の先頭に立つ「革命家」になった。彼に代表される階級の中心をなすのが、製造業の衰退でかつての豊かさを失った白人労働者たちだ。「私たちは、首都ワシントンから

カにとつてより大きな課題になった。トランプは自らの得意技でそれにこたえようとした。

30代 それを認めるとしても、分断を利用し、広げた彼の罪は小さくない。

年金 国家からの権力の分散は国家間だけでなく、各国内でも進んだ。消費の過剰化が個人への、産業のソフト化が企業への権力の分散を駆動した。ただし、企業への分散は均質に進んだわけではなく、ソフトな産業により多く、ハードな産業にはより少なく分散し、後者の企業の中には逆に権力を削がれるところも出てきた。アメリカからラストベルトと呼ばれる地域に立地する石炭・鉄鋼・自動車など斜陽産業の企業だ。

分散した権力を手にした個人はそれに相応する処遇を求める。だが、ラストベルトの労働者たちは逆に冷遇されていると感じていた。それを察知し、責任はワシントンのエスタブリッシュメントにあると訴えたトランプは多くの労働者の代表になり得た。

ニュース日記 758
中村 礼治

トランプの4年